

奨励研究報告書

研究課題

茶の湯成立期の和歌・連歌の受容状況

北海道大学大学院文学研究科言語文学専攻博士後期課程

工藤 隆彰

## はじめに

報告者の研究目的は、茶人であるとともに連歌作者或いは歌人でもあった人々の活動の実態、茶の湯と和歌・連歌との間に存在する影響関係を正確に解き明かし、その史的展開を示すことである。本研究課題はその起点として、中世末期から近世初頭の主要な茶人達の連歌に関わる事跡、及び掛物として使用された歌人・連歌師の手跡の情報を収集し、考察を行った。

### 一

連歌作者としても活動した茶人達については、本研究助成への採用以前から調査を行っており、その成果の一部は先に発表した拙論「千利休の文事―中世末期の茶人と連歌―」（『茶の湯文化学』第二六号、二〇一六年十月）で示している。そのなかで、武野紹鷗と千利休の連歌への関わりは従来の認識よりも希薄なものであるとともに、茶の湯と連歌との関係を論じる上で重視すべきなのは、張行への旺盛な参加や連歌師との多面的な親交が確実に認められる辻玄哉と津田宗及であり、さらに古田織部が注目されることを述べた。

玄哉の連歌活動については、既に米原正義氏や木藤才蔵氏等が詳しく論じている(1)。報告者はそれに加えて、曼殊院宮良恕法親王(一五七四―一六四三)の聞書に、玄哉が無想連歌についての不審を宗養に質した話が見えることを指摘した。

一方、宗及も堺の連歌作者の一人として木藤氏に取りあげられており、その後玄哉・織部と同様に『俳文学大辞典』『連歌辞典』にも立項されている(2)。ただし、具体的な活動に対する言及は乏しく、永禄六年(一五六三)から天正十五年(一五八七)に渡って幽斎・紹巴・昌叱らと多く一座し、元亀二年(一五七一)二月の『大原野千句』にも参加したことが触れられているに過ぎない。報告者はこの他に注目される宗及の活動として、永禄六年に没した宗養の追善百韻で紹巴の発句に脇を付けており、この張行は宗及のもとで行われたと考えられること、また永禄十二年八月七日に行われた紹巴・幽斎・昌叱の三吟で執筆を務めており、張行を運営する際の作法にも通じていたと考えられることを述べた。

また、先行研究は宗及を取りあげる際に、その一族で珠光門下の茶人とされる宗伯を、肖柏(牡丹花・夢庵)門下の連歌作者である宗珀と同一視して言及しているが、この両者については拙論「牡丹花的伝弟子」伊予屋宗珀」(『国語国文研究』一四六号、二〇一五年六月)で別人と考えられることを示している。

織部については木藤氏が活動を概観した後、近年鶴崎裕雄氏がさらに詳しく論じている(3)。しかし、両氏が言及していない織部の連歌で、伊藤敏子氏に取りあげていた近衛信尹との青何百韻が注目される(4)。これは慶長十九年(一六一四)五月九日のもので、伊藤氏は信尹自筆による清書としている。発句及び第三で作者名が「重臧(蔵の古体)」と記され、六句目から「重然」になる点是不審だが、信尹が途中まで書き誤ったのであろうか。史料とすることに問題がない場合は、伝存する記録のなかで織部唯一の両吟百韻、かつ最も早く発句を詠んだ張行である。慶長十九年の織部には信尹から連歌の指導を受けていたことを示す書状、及び参加した張行の記録がそれぞれ多数残るが、その間に確認できる信尹との一座はこの青何百韻のみという点もあわせて、織部の連歌のなかで特に重要なものと言えるであろう。

### 二

和歌・連歌に関わる掛物が茶会に見える最初の例としては、天文二十四年(一五五五)の武野紹鷗による「定家色紙」(小倉色紙)の使用が知られている。これは内容に疑問点が多い『今井宗久茶湯書抜』の記録であることに注意しなければならないが、『天王寺屋会記』にも弘治三年(一五五七)三月二十九日の津田宗達の茶会をはじめとして、様々な茶人による「定家色紙」の

使用が散見されるので、紹鷗が没する前後から小倉色紙が用いられるようになっていたことは認められる。以降、和歌が記された掛物のなかで、小倉色紙を中心に定家関わった(とされていた)ものは大きな割合を占める。それらの一部については、名児耶明氏がいわゆる四大茶会記及び『徳川実紀』『隔蓑記』から、万治三年(一六六一)までに確認される使用者をまとめている(5)。

他方、名児耶氏は定家以外の歌人・連歌師等の詠作や手跡についても、四大茶会記を調査して寛永年間までの用例を整理している。その傾向としては三条西実隆・肖柏・宗長といった宗祇門下の連歌師・連歌作者達、そして西行・藤原俊成・藤原家隆・藤原良経といった定家とともに『新古今和歌集』の中核を担った歌人達に関わるものが用いられており、その他には紀貫之、里村紹巴、一休宗純、豊臣秀吉・秀頼等の名前が見える。ただし、いずれも小倉色紙に比して使用回数は僅かで、一度きりのものも幾つかある。

以上は主要な茶会記を通して指摘されていた近世初頭までの様相であるが、名物記からは何が窺えるか。まず、近世以前の名物記に見えるのは「定家色紙」のみである。それさえも、天文年間の情報を主体とする『清玩名物記』、これを若干さかのぼる時代の名物を記す『往古道具値段付』といった紹鷗時代の重要な名物記には記載されていない。天正年間前期の名物記である『天正名物記』『宗久宗易道具書立』にも未だ見えず、紹鷗没後三十年を経て『天正十三年名物記』に「秀吉様御物分」として「定家色紙」が挙げられ、また『山上宗二記』で紹鷗旧蔵・宗久所持及び宗及所持の色紙が言及され「右定家の色紙の事、下絵あるがよし。下絵のなきはわるし」と述べられるに至る(6)。

では、近世に入ってから名物の評価を明確に得たのは、どのようなものであったか。近世の名物記としては將軍家の道具帳があり、寛永以降のものが数種紹介されている(7)。最も年代が早いのは、『松屋名物集』に「家光公」の部として載せられている寛永九年(一六三二)の内容で、そのなかから和歌・連歌或いは歌人・連歌師に関わるものを抜き出すと、以下の通りである(8)。

- 「一ノ御長持」 「歌書之部」  
① 定家卿あしやう集 ② 忠度百首 ③ 定家卿仮名づかひ  
「二ノ御長持」 「掛軸之部」  
④ 定家卿懐紙 ⑤ 両筆宗祇、野州、  
「三ノ御長持」 「歌書之部」  
⑥ 俊成卿巻物 ⑦ 家隆巻物 ⑧ 伏見院長恨哥 ⑨ 同手本 ⑩ 尊円琵琶行  
⑪ 尊円伊勢物語 ⑫ 同詞花集 ⑬ 同古今 ⑭ 為家伊勢物語 ⑮ 道風巻物  
⑯ 大乘院古今 ⑰ 東野州古今 ⑱ 佐理手本  
「三ノ御長持」 「掛軸之部」  
⑲ 俊成定家両筆 ⑳ 定家文 ㉑ 東野州懸ケ物

全体を見た場合、①③④⑯⑳と定家に関わるものがやはり多い。それに次ぐのは「二ノ御長持」「歌書之部」に⑩⑬⑭が集中して見える尊円法親王である。尊円法親王は青蓮院流の祖として知られるが、同じ部に収められた伏見院・小野道風・藤原佐理も能書として著名な人々である。

しかし「掛軸之部」に注目すると、定家以外で用いられているのは⑤と㉑でいずれも「東野州」、つまり東常縁に関わるものである。一方で「歌書之部」にも⑯があることから、近世初頭には定家に加えて常縁の詠作や手跡が名物として重用されていたと考えられる。

⑤は以降の將軍家の道具帳にも記載され続けるが、その献上者を示す場合、織部の名が記されている(9)。また、將軍家の道具帳の情報が接合されている『毛利家書戴名物記』の「掛物」の部を見ても、「古田織部見出シ名物ニナル」という一群のなかに『定家俊成両筆』と『東野州宗祇両筆』がある(10)。

他方、茶会記から確認できる常縁の詠作・手跡の使用は僅かである。しかし、その初見はやはり織部の茶会記で、『古織会附』慶長十六年(一六一一)正月二十六日昼の条に「床に常縁・宗祇両筆懸物」とある(11)。また、織部流の伝書である『古田織部正殿聞書』『聞書五』にも、「東野州

之手跡、歌、発句、文、何も用可出也。発句に野州脇をせられたる、野州之被書たるを、古織之掛候也」という記述が見える<sup>(12)</sup>。なお、織部の後は弟子である小堀遠州が、寛永十八年（一六四一）三月二日朝等に、常縁書写の『古今和歌集』を鎖の間の棚に用いている<sup>(13)</sup>。こうした状況に鑑みて、常縁の詠作や手跡が名物に位置づけられたのは、織部が見出して使用したことに端を発すると考えられる。

### おわりに

和歌や連歌に造詣が深く、その影響を茶の湯に反映させた茶人としては、紹鷗と遠州が重視されてきた。しかし、紹鷗が連歌に関わったことを明確に示す同時代の日記や張行の記録は無きに等しく、むしろ玄哉・宗及、そして織部に連歌作者として注目すべき活動が確認できる。一方で、織部は歌人の東常縁・その弟子で連歌師の宗祇による両筆を掛物として用い、以降常縁の詠作・手跡は名物とされるようになった。さらに、紙幅の都合で言及し得なかったが、『茶道長問織部抄』をはじめとする諸般の茶書からは、織部が度々和歌・連歌の引用によって自身の思想を示していたことも窺える。

織部は連歌作者の側面を持つとともに、遠州以前に道具・精神の両面で茶の湯と和歌・連歌を深く結びつけていた存在として、改めて評価されるべきではなからうか。今後は織部の書状や聞書、織部に関わる伝書等に注目してさらに考察を進め、茶の湯と和歌・連歌との関係の展開において織部が果たした役割を、より明確なものとしていきたい。

### 注

- (1) 米原正義「武野紹鷗の一ノ弟子辻玄哉」（『茶道雑誌』一九六一年九月十月号所収）、木藤才藏『連歌史論考下』（増補改訂版、明治書院、一九九三年）参照。以下、木藤氏の説はこの論考に拠る。
- (2) 『俳文学大辞典 普及版』（角川学芸出版、二〇〇八年※親版一九九五年）、廣木一人編『連歌辞典』（東京堂出版、二〇一〇年）。
- (3) 鶴崎裕雄「古田織部の連歌と茶の湯」（『茶の湯文化学』二十三号、二〇一五年三月）参照。
- (4) 千賀四郎編『茶道聚錦四 織部・遠州・宗旦』（小学館、一九八三年）図版番号74参照。
- (5) 名児耶明「『小倉色紙』と茶」（戸田勝久先生喜寿記念論集刊行会編『武野紹鷗わびの創造』所収。思文閣出版、二〇〇九年）参照。
- (6) 引用は、熊倉功夫校注『山上宗二記 付茶話指月集』（岩波書店、二〇〇六年）に拠る。
- (7) 矢野環『君台観左右帳記の総合研究 茶華香の原点 江戸初期柳営御物の決定』（勉誠出版、一九九九年）参照。
- (8) 引用は、『茶道古典全集 第十二巻』（淡交社）に拠る。
- (9) (7)に同じ。
- (10) 引用は、筒井紘一編『茶道学大系第十巻 茶の古典』（淡交社、二〇〇一年）に拠る。
- (11) 引用は、市野千鶴子校訂『古田織部茶書二』（思文閣出版、一九八四年）に拠る。
- (12) 引用は、市野千鶴子校訂『古田織部茶書一』（思文閣、一九七六年）に拠る。読点は私に補った。
- (13) 小堀宗慶編『小堀遠州茶会記集成』（主婦の友社、一九九六年）参照。